

した。どうか、よろしくおねがいします。」

と吉十郎は、和尚さんの前で、頭をさげました。

「うむ、その話は聞いたよ。」

和尚さんは、しばらく、じつと吉十郎をみつめていました。

「ところで、お前は、いくつになつたのかな。」

「十五になりました。」

「うむ、少し早いな。だが、お前ならできる。」

和尚さんは、気をとり直すように、お茶をひといき一息に、のみほしました。

「で、吉十郎、いや、肝煎きまじりどの。まず何をやらねばならないかな。」

「はい、村の年貢米ねんぐくまいがきちんと納められるようにすること。そして、洪水こうすいを

防ぐ、洪水から村を守らなければならない、と思います。」

と吉十郎は、考えながら答えましたが、和尚さんの顔はにこやかに笑っています。